

国際理解・国際協力のための 作文・感想文コンテスト

2021

優 秀 作 品 集



日本国際連合協会山口県本部

Yamaguchi Prefectural Chapter of the
United Nations Association of Japan

序

国際連合(国連)は、世界の平和と経済・社会の発展のために協力することを誓った独立国が集まって設立された機関で、現在 193 カ国が加盟し、日本は昭和 31 年(1956 年)に加盟しました。

山口県では、昭和 27 年(1952 年)に「県民の運動として国連の目的実現に協力すること」を目的に、日本国際連合協会山口県本部を設立して以来、県民の皆様に国際社会の平和や安全をはじめ貧困等の諸問題を身近に考えていただき、国連の役割や国際理解を一層深めていただけるよう活動を行っています。

今年度の、「国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト」、「高校生による SDGs に関する感想文コンテスト」では、県内から多数の御応募をいただき、その中から、優秀な作品を選び、この作品集に掲載しましたので、ぜひご一読ください。

日本国際連合協会山口県本部

本部長 加登田 恵子

日本国際連合協会山口県本部について

主な活動内容

- ◆ 「国際理解・国際協力講演会」等の開催
- ◆ 各種コンテストの開催
 - 「国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト」
 - 「高校生による SDGs に関する感想文コンテスト」
 - 「外国人による日本語スピーチコンテスト」

ホームページ

<http://unaj-yamaguchi.sakura.ne.jp/>



国際理解・国際協力のための作文・感想文コンテスト 2021

優秀作品集目次

中学生の部 第61回 国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト

特賞（山口県知事賞）

2

「もし私が世界の問題を一つだけ解決できるとしたら、何を解決しどんな世界にしていきたいか」 ～ 私たちの未来のために ～

上関町立上関中学校 3年 林 友 里 菜

特賞（日本国際連合協会山口県本部長賞）／ 全国大会 金賞

4

「もし私が世界の問題を一つだけ解決できるとしたら、何を解決しどんな世界にしていきたいか」 ～ 一歩前に踏み出そう ～

高水高等学校附属中学校 1年 穂 山 桃 子

優秀賞（公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞）

6

「もし私が世界の問題を一つだけ解決できるとしたら、何を解決しどんな世界にしていきたいか」 ～ 多様性と調和の世界 ～

光市立島田中学校 2年 井 上 史 絵

優秀賞（山口県ユネスコ連絡協議会長賞）

8

「もし私が世界の問題を一つだけ解決できるとしたら、何を解決しどんな世界にしていきたいか」

高水高等学校附属中学校 3年 森 脇 潤

特別賞（国際ソロプチミスト山口賞）

10

「もし私が世界の問題を一つだけ解決できるとしたら、何を解決しどんな世界にしていきたいか」

光市立浅江中学校 1年 高 村 愛 理

特別賞（山口ロータリークラブ会長賞）

12

「もし私が世界の問題を一つだけ解決できるとしたら、何を解決しどんな世界にしていきたいか」

高水高等学校附属中学校 2年 松 本 珠 月

高校生の部 第28回 高校生によるSDGsに関する感想文コンテスト

特賞（山口県知事賞）

15

SDGs②：飢餓をゼロに「未来のためにできること」

山口県立熊毛南高等学校 2年 上岡 京史

特賞（日本国際連合協会山口県本部長賞）

17

SDGs⑪：住み続けられるまちづくりを

「学生の私達が高齢者のためにできること」

サビエル高等学校 2年 杉谷 唯衣

優秀賞（公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞）

19

SDGs②：飢餓をゼロに「一人一人が『もったいない』を減らす」

山口県立下関中等教育学校 2年 澤田 茉倫

優秀賞（山口県ユネスコ連絡協議会長賞）

21

SDGs①：貧困をなくそう「ランドセルは海を越えて」

柳井学園高等学校 3年 内海 愛喜

特別賞（国際ソロプチミスト山口賞）

23

SDGs⑤：ジェンダー平等を実現しよう

「本当の『誰一人取り残されない社会』とは」

山口県立防府高等学校 2年 石丸 寿江

特別賞（山口ロータリークラブ会長賞）

25

SDGs⑪：住み続けられるまちづくりを

「住んでいるまち、住み続けるまち」

高水高等学校 2年 村上 翼紗

第 61 回

国際理解・国際協力のための
中学生作文コンテスト

優 秀
作 品 集

特 賞（山口県知事賞）

もし私が世界の問題を一つだけ解決できるとしたら、何を解決しどんな世界にしていきたいか

～ 私たちの未来のために ～

上関町立上関中学校 3年 ^{はやし ゆりな} 林 友里菜

RESPONSIBLE CONSUMPTION AND PRODUCTION。

みなさんはこの言葉を聞いたことがありますか。これはSDGsの一つで、「つくる責任 つかう責任」と訳され、持続可能な生産消費形態を確保して、地球の資源の枯渇を防ぐことを目標としています。現在私たちは、たくさんのものに囲まれて暮らしています。そして、それに伴い大量の資源を消費し、廃棄物を生んでいます。しかし、このような生活が永続的に続くとは限りません。資源を有効利用するために生産者と消費者はこの課題にどう取り組んでいけばよいのでしょうか。

私は小学生の頃、東京に住んでいました。家の回りにはたくさんの店があり、欲しいものを自由を買っていました。しかし、そのような消費行動が地球にどのような影響を及ぼしているのか最近になってようやく分かりました。製品を作るには原材料や石油が必要です。そして、大量のCO₂が排出されます。結果的に地球の資源は失われ、気候変動を招いてしまうのです。その事実を理解した時、自分にできることは何だろうと考えました。

まず取り組みたいのは、ものを大切に资源の無駄使いをしないということです。今あるものを最後まで使い切ったり、新たにものを購入するときは、本当に必要なものか、量は適切かを考えたりする。これならすぐにでも取り組めるのではないのでしょうか。安いからと服をたくさん買ったり、持っているのに必要以上にものを買ってしまったり。私はこのような消費行動を改めることから始めたいと思います。需要が増えると供給も増えてしまいます。その連鎖を断ち切り、大消費社会から地球に優しい社会に変えることが大切です。

企業の中にも、SDGsについて、生産者の立場で責任を果たしている例があります。パナソニックは、耐久性を上げて長く使える商品を販売しています。その為、故障や早期の買い換えを防ぎ、消費から生産までのサイクルを遅らせることができます。また、ユニクロは、店舗で着なくなった服を回収し、NGOやNPOとともに世界で服を必要としている人々に届けています。また、別の企業は100%バイオマス系素材からできたプラスチックを開発しています。企業での取り組みが消費者の意識も変えていくと思います。

我が家では、着なくなった服や読まなくなった本、使わなくなった家具などがあるれば、慈善団体などに寄付しています。また、環境に配慮されている製品を買ったり、形や大きさ、色が合わないために廃棄されてしまうものを求めたりするようにしています。

次に資源を守るために必要なのは、食品ロスを減らすことです。日本では、毎日大型トラック約1,700台分の食品が廃棄されています。この問題を解決するためには、食品を買いすぎない、食べられる分だけ調理する、地元の生産物を購入する、外食時は食べきれぬ量を注文する、買いすぎた食品や余った贈答品はフードドライブなどへ寄付をするといった策が挙げられます。私の家では、賞味期限が切れて捨てられる食品が減るように、期限の近い食品はホワイトボードに書いて、それらを優先して調理するようにしています。全ての家庭で食品ロスを減らすためにできることを、それぞれが意識してやっていくことが大切だと思います。

今を生きる以上、石油などの資源を消費せずに生きていくことはできません。でも、その限りある地球資源の消費を少しでも抑え、幸せな未来社会のためにできることは身近にあると思います。SDGsの達成は大きな企業だけがやるのではなく、一人一人が意識して取り組むことではじめて達成できるのです。これから何年先も地球で安心して暮らしていくために今できる最大限のことをして、日々生活していきたいと思います。

特 賞(日本国際連合協会山口県本部長賞) / 全国大会 金賞

もし私が世界の問題を一つだけ解決できるとしたら、何を解決しどんな世界にしていきたいか

～ 一歩前に踏み出そう ～

高水高等学校附属中学校 1年 あきやま ももこ 龜山 桃子

海のそばで暮らす私は海洋ごみを目にすることが多く悲しい気持ちになる。どうかしななければ、というおmoiがずっとある。世界中で年間800万トンの海洋ごみが発生しているという。海で死んだクジラやウミガメの体内からおびただしい量のごみが発見されることも多いと聞く。魚の量を上回るかもしれない海洋ゴミは、深刻な問題だ。海洋ごみの8割は、ペットボトルやレジ袋など街で発生したプラスチック製品だ。近年、デリバリーやテイクアウトの需要が増え、プラスチック容器も増えていることを感じる。どちらも、一度使えばすぐに捨ててしまう、「使い捨てプラスチック」である。

2015年の国際サミットで採択された国際目標のなかで、「海の豊かさを守ろう」、「つくる責任つかう責任」が掲げられている。そのために私が今、弟と一緒に取り組んでいることがある。自然界の微生物によって水と二酸化炭素に分解され自然にもどる、生分解性プラスチックの研究だ。プラスチックは軽くて丈夫、アルカリや酸にも強く衛生的でもあることから家庭において必須である。また、成形しやすく軽いため自動車や飛行機、電化製品、住宅など多くの分野で使われている。医療においてもプラスチックは欠かせない存在だ。だから、プラスチックを排除することは不可能であると思う。そこで、環境にやさしいプラスチックをつくることのできないだろうかと思い試作を行っている。新型コロナウイルス感染拡大により休校が続いたとき、大量に給食の牛乳が廃棄されていることを知った。食料廃棄軽減にもつながるのではないかとも思い、まずは牛乳をつかったカゼインプラスチックをつくることから始めた。その他にも、豆乳など植物由来の原料をつかったプラスチックづくりも行っている。

現代は生産性が高まり、ものにあふれている国が多い。しかし、生産性も永久的に続くとは限らないし、生産することは資源を消費しなければならない。このままものを作り続ければ、資源はいつか枯れてしまう可能性が高い。持続可能な生産、消費の形態を確保するために、日々の生活で私ができることは、廃棄物の削減と食料廃棄の軽減だと思う。そして、生産→消費→廃棄のシステムそのものを変革していくことが大切だ。プラスチックは、製品コストが安く大量生産が可能である。し

かし、再利用するためにはコストがかかり、リサイクルするたびに劣化していく。そのため、使用後のプラスチックの大半は、ごみとして焼却したり埋め立てたり、もしくは海洋ごみのように環境中に漏れ出てしまっているのが現状だ。

私の祖父は、小さな町工場で車の整備や修理の仕事をしている。車以外にも重機や自転車、電化製品、家具まであらゆるものを可能な限り修理をしては使う。修理ができない場合は、分解してその部品を使い、他製品をつくる。どうしても使えないものだけ分別後、リサイクル業者に引き取ってもらう。まさに、Reduce、Reuse、Recycle の精神だ。可能な限り使い廃棄物を減らす。廃棄するときはエネルギー源として再利用する。祖父は、これを日頃から当たり前のように行っている。このような考え方や行動を継承していくことも、私たちの使命であり、解決への道筋であると思う。

SDGs は、世界を変えるための壮大な目標であるが、私が日常生活において実践できる活動はたくさんある。限りある地球の資源を有効的に使い、地球環境を守るため、そして2030年、よりよい世界になっていることを目指し、私はこれから生産する側、消費する側として責任をもって行動したいと思っている。そのために、一歩前に踏み出すことから始めることにした。簡単なことでいいから、できることを一つずつ。ひとりひとりの意識改革と行動により、必ず達成できると信じている。

優秀賞(公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞)

もし私が世界の問題を一つだけ解決できるとしたら、何を解決しどんな世界にしていきたいか

～ 多様性と調和の世界 ～

光市立島田中学校 2年 ^{いのうえ ふみ え}井上 史絵

私はこの夏、東京オリンピックを見ていて何度も耳にした「多様性と調和」について考えた。調べてみると、多様性とは幅広く異なる群が存在すること、調和とは全体がほどよくつりあってまとまっていることであつた。これだけではよく理解することができなかった。多様性と調和を実現した世界とはどんな世界なのだろうか。

私は、オリンピックの開会式で各国の選手が入場する場面で難民選手団というチームがあることを知った。難民選手団とは、紛争や迫害により故郷を追われた難民アスリートによって結成されている。今回のオリンピックには11カ国の出身の29人が参加しているそうだ。私は、今でもこれほど多くの国で内戦や紛争が起きていることにとても驚いた。また、私は難民と聞いて、戦争のない国に住む私たちと違い多くの困難の中で生きている人々を想像した。しかし、入場する選手は苦難を感じさせない笑顔で誇らしげに歩いていたのだ。その時私は、この選手たちも他の国の選手たちと同じように夢をもってオリンピックの舞台を目指してきたのだということに気がついた。難民選手の困難な現実の中でも努力して前に進み、他の国の選手と同じように舞台上で輝く姿は私に勇気をくれた。

けれど、難民選手のような人はごく一部で世界にはまだ多くの人が内戦や紛争に苦しんでいる。人種や宗教、国籍などを理由に差別を受け、自国にいと迫害されるのだ。私は、その中の約40%が私と同じ18歳未満であることに驚いた。その人たちは親を失っていたり、学校に行かず弟妹を育てたり、働いたりして、食料にも困っているという。私にはそんな生活は考えられなかった。なぜなら、私の生活には当たり前で育ててくれる親や家族がいて、誰もが学校に行き勉強をし、毎日お腹いっぱいご飯を食べられるからだ。また、夢をもって自分の道を自分で決めることもできる。私は、このことが当たり前ではなく本当に幸せなことだと実感した。

そして、この苦しんでいる人々を救うためには、世界中の人が手を差し伸べなければならないと思う。現在も難民を支援する組織があるという。その活動に参加し、支援金を寄付することは苦しんでいる人々のためになるだろう。けれど、そんな大きなことができなくても世界には今も苦しんでいる人がいるということを知り、そ

してそのことを周りの人に伝え、多くの人にその存在を知ってもらうことが私にもできる平和で平等な世界への第一歩になると思う。私は「多様性と調和」とは人種や宗教、国籍は関係なく平等で誰もが生きやすい世界のことだと思った。戦争がない国に住む私たちも、戦争に苦しむ人々も皆同じように全てが大切な命であることを忘れてはいけないと思う。また、誰もが生きやすい世界の実現のためには一人一人の違いを理解して認め合い、互いを尊重することが必要なのである。

優秀賞(山口県ユネスコ連絡協議会長賞)

もし私が世界の問題を一つだけ解決できるとしたら、何を解決しどんな世界にしていきたいか

高水高等学校附属中学校 3年 もりわき じゅん 森脇 潤

私の体の約60%を占めているのは水分です。私たちが健康に過ごすためには安全な水は欠かせません。日本に住んでいる私たちの周りには安全な水が当たり前のようにたくさんありますが、そのような国はほんの一握りで、開発があまり進んでいない国など世界中の多くの人々が不衛生な水を原因とする感染症や病気で苦しんでいます。

昨今話題になっているSDGsでは、地球上の誰一人取り残さないというスローガンを掲げ、現代社会が抱える様々な問題を解決するために定められた17の目標で構成されており、「安全な水とトイレを世界中に」という項目が第6項に含まれています。もし私が世界の問題を一つだけ解決できるとしたら、すべての人々に衛生的な水を届けられるように設備を整え、すべての人々の命が保障されるような社会を作りたいと思います。WHOが定める安全な水にアクセスできる人の目安として、1km以内に一人1日20ℓの水を確保できる場所があることとなっていますが、この条件を満たすことができない人は世界中に約9億人以上いると言われています。これは命に関わることはもちろん、教育や経済までも左右する深刻な水問題です。テレビなどで途上国の子どもが水を汲みに行くシーンをよく目にします。生きていくために水汲みは重要な仕事ではありますが、児童労働により学校にも行けず本人たちが望んだとしても満足な教育を受けることができないことは教育の不平等であり、将来希望する職に就けず生活が困窮するケースも多いのが現状です。さらに、これから近い将来、地球温暖化や人口増加などの影響で水不足が深刻化すると予想されているため、世界規模でインフラ整備をすすめるなど水問題への早急な対応が求められます。

水不足により飲料水が枯渇すると、人々の健康と命にも影響を及ぼし、農業用水の供給が不安定になると、農作物が育たなくなり、食糧危機に発展し、人々の生活は脅かされます。その上、水をめぐる紛争なども起こりうる可能性があります。学生の私にでもすぐ実行できることは「節水」です。資源のリサイクルで行われている3Rという活動がありますが、水でも同じように『水の3R』活動ができるはずです。使用する水を、必要最低限にするリデュース・繰り返し使うリユース・処理して再利用するリサイクルを徹底し、環境保全に少しでも貢献していきたいで

す。

このSDGs目標を達成するためには世界のトイレ事情についても解決する必要があります。開発途上国をはじめとするインフラ整備が整っていない国や地域では、汚染された水や不衛生なトイレが原因で、免疫力の低い子どもが亡くなってしまうケースが多く見受けられます。幼い子どもたちの健康が守れないだけでなく、働き手の減少につながり、国の発展が遅れてしまうほか、SDGsのその他の目標達成にも影響を及ぼします。以前、私は富士山へ登山したことがあります。登山中トイレは数か所しかなく貴重なものでした。山頂では水はほとんど使えないため、微生物の働きにより処理されるバイオトイレが設置されていました。このトイレのように、環境に配慮した新しい技術がますます発展していけば、水不足の解消にも、人々の健康を衛生的に守ることにもつながると考えます。

世界で猛威をふるうコロナ禍から抜け出すためには、手洗い・うがいが重要とされていますが、もしその手洗い・うがいをする水が不足していたり、不衛生だとしたら、コロナの予防どころか健康に悪影響を及ぼしてしまいます。

私たちは、限りある資源を大切に、また永久に続くように、一人一人が環境保全について意識を高め、SDGsの目標を実現し、世界中の人々が安心して暮らせる未来が来るように努力していきたいと思えます。

特別賞(国際ソロプチミスト山口賞)

もし私が世界の問題を一つだけ解決できるとしたら、何を解決しどんな世界にしていきたいか

光市立浅江中学校 1年 ^{たかむら あいり}高村 愛理

もし私が世界の問題を一つだけ解決できるなら、差別を無くして、みんなが平等に暮らせる世界にしたいです。

そう思った一つ目の理由は、人種差別です。私はテレビのニュースで見るまで、人種差別という物をあまり知りませんでした。世界で起こっている悲しいニュースを見て、どうして肌の色や目の色、髪の色が違っている事で差別が生まれるのだろうと不思議に思いました。

同じ事件を扱っても、ある人種には有利になり、また、他の人種では不利な結果になる事があると聞きました。平等でないといけない場面で差別が起こっている事は、許されないと思います。この作文を書き始めて、ブラック・ライブズ・マターという言葉を目にしました。差別が原因で起こっている悲しい事件に対して、今、たくさんの人が声を上げています。すぐに私にはできないかもしれないけど、勇気を出して行動に移す事の大切さに気付く事ができました。

今、東京オリンピックが開さいされています。私は開会式で、外国の選手が入場の時に、富士山や桜の柄が入ったユニフォームを着ているのを見て、日本の事を考えて着てくれているんだなと思い、嬉しくなりました。国や人種関係なく、おたがいを尊重し合えるオリンピックはすばらしい大会だと思います。オリンピックが終わっても、世界中の人々がこの気持ちを忘れずにいられたら、もっと平和な世界を作る事が出きると思います。

二つ目の理由は、コロナウイルスによる差別です。テレビのニュースでアジア人というだけで、暴行を受けている映像を見ました。とても怖く、悲しいニュースでした。新しい病気で、まだ治りよう薬や解決策も見つかっていないので、不安になる気持ちは理解できますが、その事で人を傷つけていい理由にはなりません。こういう時こそ、個人や自分の国の事だけを考えるのではなく、世界中の人々が安心して暮らしていけるように、みんなが協力しないといけないと思います。

また、とても残念なのが、医りよう従事者の方への差別です。日々、危険な環境で家族にも会えず、お仕事をしてくれているのに、周りの人からの心無い言葉によって傷ついている方々もいます。私は、患者さんのために頑張ってくれている方々に、どうして自分勝手な言葉を言うのだろうと思いました。みんなが感謝の気持ちを

持っていれば、自しゅくもしようと思うし、世界ももっと良くなると思います。新しいウイルスで分からない事も多いけど、私達一人一人の行動で医りよう従事者の方々の負担も減らせると思います。

もし身近な人がコロナウイルスに感染した時、陰で話したり、仲間外れにしたり、以前と態度を変えたりしてしまうことも、差別につながると思います。そこで、私はどんな行動をとるのが正しいのだろうと考えました。コロナウイルスに感染した人に対して差別をせず、間違ったうわさにまどわされないように、正しい知識を身に付けたいです。そしてみんなが安心して暮らせるようになったらいいなと思います。

私はこの作文を通して、住んでいる場所や性別、病気など、まだまだ色々な差別がある事を知りました。私達が気付いていないだけで、言われた相手はとても傷ついている事があるかもしれません。今は、SNSなどの、自分の意見を発信できる手段がたくさんあります。でも相手が見えない分、日頃では言わない差別につながるような言葉を使ってしまい、相手を傷つけてしまうかもしれません。だから言葉にする前に、一度振り返って、相手の立ち場に立ってみる事が大事だと思います。そうする事で、国や性別も関係なく、相手に対して思いやりを持つ事ができます。私は、大きな力はないかもしれないけど、「もし」ではなく、必ず差別を無くして、みんなが平和に暮らせる世界にしたいです。

特別賞(山口ロータリークラブ会長賞)

もし私が世界の問題を一つだけ解決できるとしたら、何を解決しどんな世界にしていきたいか

高水高等学校附属中学校 2年 ^{まつもと みづき} 松本 珠月

人身売買や人身取引。これは世界の問題の一つである。しかしながら、これらを取り締まる法律は「人身売買罪」だけなのである。では、私たちはどのように人身売買や人身取引の問題を解決していくことが必要なのかを考えていきたいと思う。

私はとあるテレビ番組で人身売買や人身取引を防いだというキャビンアテンダントの話を観たことがあった。その時の状況は、人身売買や人身取引ではよくある手口だった。飛行機はすでに離陸していたため出口はなかった。そして、女の子は飛行機の窓際。男性は通路側であったため、女の子はその男性から逃げられない状況だった。女の子はキャビンアテンダントに助けを求めることも出来なかった。そこでキャビンアテンダントは、女の子にトイレに行くように指示をした。キャビンアテンダントはトイレに「助けはいる？」と置き手紙をした。助けを求めた女の子は、無事に飛行機着陸後警察に保護された。このような、人身売買や人身取引がまだ世界各地で行われているのだ。

私は、このような人身売買や人身取引を解決しすべての人々が助け合える世界にしていけるには、まず一人一人が助け合いの心を持つことが大切なのではないかと思う。だが、それはとても困難なことであり、それが出来ているのであればこのようなことは起きていないだろう。よって人身売買や人身取引・DVを受けている被害者が使えるサインがあることをより多くの人を知ることが大切である。このサインは犯人にばれずに助けを求めることが出来る。やり方は、片方の手のひらを人に向け、親指を手のひらに押し込むだけだ。言語を使わないため、喋る必要がなく、全世界の人が使うことが出来る。しかし、このサイン自体の意味を知っていないと人身売買が起こっていても、助けることが出来なかったり、自分が被害者になってしまっても使うことが出来なかったりする。だから、サインを世界に広め、人身売買や人身取引を一人一人ですぐに気をつけるだけでなく、みんなで助け合っていくことも大切なのではないかと思う。

私はこのサインを動画で知ったが高齢者の場合スマートフォンやパソコンをあまり使わないため、動画などでは知る機会が少ないと思われる。そこで、ポスターなどで呼びかけることで高齢者にサインの存在を伝えることが出来るだろう。また、その取り組みを行っているときに知った方がまた他の人に発信していけばより多くの人

にサインの存在を知ってもらうことが出来る。小さな地域で行う活動や一人一人が周りの人にサインを伝えることで人身売買や人身取引を防ぐことができ、且つ自分の身を守るきっかけにもなるかもしれない。

私は前述したように全ての人々が助け合える世界にしていきたい。一人一人が人身売買や人身取引の怖さを知り、サインを全世界に発信していくことが、世界の一つの問題を解決していくきっかけになると思う。小さな活動でも見てくれる人、聞いてくれる人が一人でも多くの人に伝えれば人身売買や人身取引を防ぐことができるのではないか。今注目されているSDGs（持続可能な開発目標）16では、「平和と公平を全ての人に」という目標がある。これも人身売買や人身取引を防ぎ平和を守るという全世界共通の願いなのだ。

現在、コロナ禍という過酷な状況ではあるが、コロナウイルス以外にもまだまだ問題はある。全ての問題を解決することは不可能に等しい。しかし、世界中の人々が人身売買や人身取引などの恐怖を少しでもなくし、サインの存在を広める活動をしていくことが平和と公平な世界に繋がっていくと私は思う。

第 28 回

高校生によるSDGsに関する
感想文コンテスト

優 秀
作 品 集

特 賞（山口県知事賞）

SDGs②: 飢餓をゼロに ～ 未来のためにできること ～

うえおか きょうじ
山口県立熊毛南高等学校 2年 上岡 京史

私は、積極的にある目標を達成に向けて力を入れたいと思っている。その目標は、「飢餓をゼロに」だ。

私はSDGsという言葉が高校生になって初めて知った。当初は「そんな活動があるんだ。でもよくわからないから今でなくてもいいし、自分が何をするわけでもないからあまり関係ないや。」と思っていた。しかし、そう思っていた私を変える一つの画像との出会いがあった。私は世界史の勉強で発展途上国の現状を調べていた。調べていると、私の考えを変える画像が一つ検索結果としてでてきた。その画像には非常にやせ細った黒人の子ども達とその両親、そして太った政府の人が写っていた。その画像を見て「なんてことだ。同じ写真に正反対の体型をした人が写っている。貧困による飢えのせいで栄養状態が悪くなる人とその人達の労働を搾取して裕福になって太っている人が同じ地域にいる。今、直接自分が何かできることはないけれど、この不平等な現状を少しでも良くしてあげたい。」と心から願った。

私自身は、日常生活の中で現状を少しでも良くするための行動自ら積極的にこなしている。具体的な活動を二つ紹介する。

一つ目はフードロス削減だ。例えばスーパーやコンビニエンスストアの商品はなるべく手前取りを心掛けている。この活動は最近コンビニ等で啓発ポスターを見かけるようになったがこの活動はフードロス削減のためにももっと皆にも実践してほしい。ほかにも、ふつう食べない非可食部を使って料理を作ることを行っている。キャベツの芯やナス・大根の皮などをあえて使って普通の料理にアクセントをつけてみたり、しっかりと火を入れてやわらかくして、キャベツの芯のお浸しのような料理をつくったりしている。

二つ目は、フェアトレード商品の購入だ。「フェアトレードマーク」これを店頭で見つけたなら積極的に購入するようにしている。もちろん普段購入している商品より少し高額ではあるし、フェアトレード商品を購入したからといってすぐに問題が解決できるわけではないけれど、私の払ったお金が発展途上国の人々の給料となって少しでも多くの食べ物を購入して栄養状態が良くなってくれたらいいなと思って購入をしている。

では、今やっている日常の活動以外に自分にできることは何かないだろうか。そう

考えた時に私はあることに気が付いた。「何も発展途上国の人だけが飢餓というわけではないんだ。日本にも今現在、コロナウイルスの影響で失業してしまい、飢えている家族がいるんだ。まずは身近な人達の飢餓を止めることもSDGsだ。」と。そこで私はある活動の一つを考えついた。その活動は私が将来の目標として考えているものだ。その活動とは低料金で栄養のバランスの整った食事を提供する食堂・カフェを開くという活動である。

その食堂・カフェの目標である飢餓問題の改善に向けて、貧困で食べられない人だけでなく、食事制限をしなければならない病気にかかった人や摂食障害を抱えた人、そして一般の人にも利用してもらい生きることと食べることについて考えてもらおうと思う。そして来てくれた人には玄米を使ったり、全粒粉入りのパンを使ったりと栄養豊富な主食から、良質なタンパク質を含んだ食品を使った主菜、1日分の野菜のほとんどを摂取できる副菜まで提供しようと考えている。誰もが飢餓に苦しむことなく健康でいられるために。

しかし低料金で提供し活動を持続するためには自分一人の力では限界がある。そのために、地域の人々の力を借りたいと思う。例えば、農家の人であれば作りすぎた野菜や果実、商品にならない作物や玉子・食用肉の切れ端を、一般の人にも自宅に余ってもう食べない食品・食器などを無料で提供していただきたい。そうすることによって低料金を維持し、フードロス削減にも貢献できるはずだ。

調べたところ、各国でフードロス削減や飢餓のための活動が行われている。例えば、現在ロンドンのブリクストンにある壁画の近くのスーパーマーケットに冷蔵庫が設置されている。その冷蔵庫の中には無料でとってもいい食品がたくさんある。その食品は全て近くの飲食店や町の人がいないと思った食品を自由に入れていたそう。その冷蔵庫の名は「コミュニティ冷蔵庫」と言われている。かつてロンドンで最も危険な地域といわれ、移民が多く、貧困の問題を抱えていた地区が地域の人々の力で復興したのである。人々の助け合いは大きな力を生むと確信した。

SDGsに掲げられている飢餓をゼロにという目標は決して他人事ではない。日本の中でも飢餓はおこっていることであり、世界中では考えられないくらい多くの人が飢餓で苦しんでいる。一人一人の小さな活動が重なっていけば少しでも改善に向かっていく。

特 賞(日本国際連合協会山口県本部長賞)

SDGs⑪:住み続けられるまちづくりを

～ 学生の私達が高齢者のためにできること ～

サビエル高等学校 2年 ^{すぎたに} 杉谷 ^{ゆい} 唯衣

日本では高齢化が深刻な社会問題となっている。私は身近な生活の中でよく実感する時がある。それは、登下校中に出会う地域の方がほとんど高齢者であることだ。高齢化社会では一人暮らし高齢者、認知症による徘徊、詐欺、災害時や生活の中での問題がたくさんある。高齢化社会の中で生きている私達は、高齢者を地域全体で支えていくことが大切だと考える。だが、実際、地域と高齢者の繋がりが弱いと感じることが多い。私はその繋がりを強くすることでSDGsの目標にもある「住み続けられるまちづくりを」に繋がるのではないかと考える。学生である私達にできることは大きく分けて二つあると考える。

一つ目は、学生である私達にも出来ることがあるのではないかと考え、「行動」することである。考えを行動にすることは難しいが、小さな行動が誰かにとって役立つと考える。私は高齢者と地域の繋がりを強めるために、友達を誘い、プロジェクトを立ち上げた。初めて「考え」を「行動」にした瞬間だった。内容は、地域の人が高齢者と高齢者の相談機関である地域包括支援センターの橋渡しの役目をする高齢者版110番の家を作るというプロジェクトである。悩みや相談事があっても、どこに相談したらいいかわからない、相談するのに勇気がいるという声を聞いたことがあった。そうした言葉から分かりやすい仕組み、相談しやすい仕組みを作りたいと思い、始めた活動だ。しかし、高齢者の相談機関の包括支援センターは認知度がとても低い。私も調べるまで全く知らなかった。取材をした中で高齢者から電話がかかってくる時には、悩みや相談が大きくなっていることがほとんどであると聞いた。だから、地域の人が橋渡しの役割になることで、悩みや相談の早期発見、早期解決、早期対処をすることで、より暮らしやすいまちづくりになると考える。地域の人だからこそ出来る支えを広めたい。目的は、何か困った時の相談先として気軽に利用してもらい、相談事だけでなくコミュニケーションもとれる場所にする事で地域との繋がりを深めること、場合によっては代わりに包括支援センターに電話をしてあげたり、相談先として紹介し、相談しやすい環境を作ることである。そうした場所を多く作ることで、徘徊の方が出た時や災害時での連携、詐欺の早期発見、一人暮らし高齢者の方もコミュニケーションを取れる場となり、地域全体で高齢者を支えることのできるまちづくり

になると考える。

二つ目は、挨拶である。別に挨拶くらいと思っている人も多いと思うが、ある経験から学生である私達がするからこそ高齢者の方の生きがいに繋がっているのだと思う体験をした。ある日の下校中、道ですれ違った一人の女性の高齢者の方に「こんにちは」と挨拶をした。挨拶が返ってきて自転車で通りすぎようとしたら、その女性に呼び止められた。すると「こんな私にも挨拶をしてくれて本当にありがとう。何も言わずにそのまま通りすぎずに挨拶をしてから通りすぎてください本当に嬉しい。近所に住んでいる多くの高齢者も学生さん達が挨拶をしてくれることを本当に嬉しがっている。ありがとう。」この言葉を聞いて驚いた。挨拶をしたことによって感謝されたのは初めてだった。挨拶をすることは単に言葉を交わすだけでなく、立派なコミュニケーションになっているのだと感じた。今までは何も考えずに挨拶をしていたが、高齢者の方にとって、それが生き甲斐に感じていると思うと、より挨拶は大事だと思った。これからはより挨拶を大切にしていきたい。学生である私達が高齢者のために果たしている役割はとても大きいと感じた。

最後に、私が始めたプロジェクトは、まだ完成には至っていないが、最終的には高齢者の方がより暮らしやすく、地域と高齢者の繋がりを結びつける役割として担うことのできる一つになりたいと考えている。今は、市という小さい規模からスタートしているが、将来的には県、全国へと私のチームが考えたプロジェクトが広がってほしい。必ずどこかでこのプロジェクトが役に立つ高齢者の方がいるのではないかと信じて進めている。プロジェクトを上手く進めていくために、多くの方に協力をしていただいている。「学生だから」出来ることは少ないのではないかと考えていたが、逆に学生だからこそ協力していただけること、できることがたくさんあったことに「行動」をして気づくことができた。自分に出来る可能性を自分で閉ざすのではなく、どんどん広げていくことが大切であると感じた。これから私は、高齢者の方の笑顔を一人でも多く増やすために、自分に出来ることを一生懸命取り組み、誰も取り残されない社会にしていきたい。

優秀賞(公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞)

SDGs②: 飢餓をゼロに ～ 一人一人が「もったいない」を減らす ～

山口県立下関中等教育学校 2年 ^{さわだ まりん} 澤田 茉倫

「今日は完食できずごめんなさい。」

私が残したご飯の量で何人の命が救えるのだろうか。

私は寮で生活している5回生です。私は食べることが大好きで、他の人より好き嫌いは少ない方だと思います。私の通っている学校で問題となっているのは寮生の残食量の多さです。毎日およそ在寮生の3分の1以上のご飯が残飯となっています。この残したご飯で何人の命が救えるのだろうか。在寮生の皆さんは、ご飯をバケツに捨てる時そう考えたことがあるのでしょうか。私は基本的に残さず全部食べることを意識しているのですが、たまに食欲がなかったり量が多くて完食できず、残してしまう時があります。残食は食器を返却する場所の隣にあるバケツに捨てるのですが、返却口にはご飯を作ってくださった調理員さんがいて、腐っていたり不味くて食べられないわけではないのに自分がお腹いっぱいだという理由で捨てるのは、本当に心が痛いのです。私をはじめとした残食がバケツで山となり調理員さんが、それを大きいゴミ袋に捨てます。そのような仕事を作ってしまうことや世界中に存在する、食べたくても食べられない人々に申し訳ない気持ちでいっぱいです。調理員さんは仕事だから私たちのためにご飯を作ってくださるのかもしれませんが、やはり残されては悲しい気持ちになると思います。

過去に私は食器を返却する時、調理員さんから「いつも全部食べてくれてありがとう。」と言われました。私が頑張って最後まで食べていることを調理員さんは知っていて言われた時はとても嬉しかったです。寮生の中には、いただきますをして、すぐデザートだけを食べて席を立つ人がいます。本当に信じられません。はじめから食べるつもりがないのならそれを食べたい人にあげたり自分が取らずにおかわりにまわしたりすればよいのに平気でバケツに捨てにいきます。自分だけならよいと思っているのでしょうか。その甘い考えが地球の資源を無駄にし飢餓で苦しむ人々を減らせずにいるのです。

SDGsの中に「飢餓をゼロにする」という目標があります。それを達成するにはこ

ういった甘い考えをなくすことからはじまるのではないのでしょうか。今世界中がコロナウイルスと戦っていて職を失い食料に困る人が増えている中で私たちはお腹いっぱい食べられることに日々感謝し残食を減らしていかなければなりません。

私達寮生が残食を無くすために最近から食事中に食欲が湧くように音楽を流したり、ご飯の量を調理員さんに調節してもらい、サラダは自分で好みのドレッシングをかけるなどして出来るだけ全部食べるようさまざまなことに取り組みはじめました。しかし、それでも残食は減ったとは言えない状況が続いています。

そこで私が一番効果が出ると考えた取り組みは、授業で飢餓で苦しむ人々の現実を実際に映像で観たり知ったりすることです。私も実際、テレビのCMで貧困で困っているアフリカの現状を観て私たちに何かできることがあるのではないかと考えさせられたことがあります。「百聞は一見にしかず」のように、聞くよりも実際に見た方が説得力があるのです。だから学校でそういった取り組みにもっと力を入れるべきだと思いました。また学校で使わなくなった物や、サイズが合わなくなった服などを捨てずに発展途上国へ送る支援をもっと普及させるべきだと思います。

世界規模の問題は一部の人が協力しただけでは解決しません。一人一人が意識して課題に取り組むことが必要だと思うので他人事にせずみんなで考えていき、明るい未来をつくっていきたいです。

優秀賞(山口県ユネスコ連絡協議会長賞)

SDGs①: 貧困をなくそう ～ ランドセルは海を越えて ～

柳井学園高等学校 3年 ^{うつみ あき}内海 愛喜

去年の春から姉が社会人になりました。それをきっかけに姉の部屋と私の部屋を母が片付け始めました。使わなくなった中学の時の教科書や使用済みのノート、体操服や他にもたくさん不要な物が出てきました。

ある日、母から姉と私が呼ばれて行ってみると小学生の時に使用していたランドセルがありました。母と姉と私でランドセルを囲んで、懐かしい思い出話になりました。そして母がランドセルを寄付出来ないか？と言い出して3人で調べました。するとジョイセフというNGO団体が毎年ランドセルをアフガニスタンなど恵まれない国の子供達へ向けてボランティアで送っていることが分かりました。それ以外にも色々な支援活動をしていることも分かりました。ホームページの中で赤いランドセルを背負っている女の子が載っていました。キラキラした瞳でとっても嬉しそうにしているのを見て、私も是非、自分のランドセルを寄付したいと思いました。

ホームページでアフガニスタンの国の貧しい情勢がたくさん紹介されており悲しくなりました。

アフガニスタンではほとんどの女子が12才ころから結婚して出産をし、しかし十分な教育を受けていないため赤ちゃんをきちんと産むことが出来ず親子共に亡くなっているそうです。医療機関が整っていないことも原因ですが、一番の原因は女性が教育を受けていないため言葉も分からず、医療に対する知識も何もなく、妊婦側も助産師側も正しい判断が出来ていないということです。看護師を目指し日々勉強に追われている私からすると信じられない情報すぎてショックでした。

アフガニスタンだけでなく貧しい国も含めて、その数は年間約28万人、1日にすると800人、普通では考えられないほどの赤ちゃんやお母さんが亡くなっています。

私達の国では赤ちゃんは病院で安全に生まれ祝福され、大切に育てられます。それは当たり前だし、そうであって欲しいです。

ジョイセフは貧しい国の子供達が教育を受けることで読み書きが出来る様になり、それは自分や家族の健康を守ることにつながるという、そういう思いで2004年からこのボランティアを始めているそうです。

私は今まで学校で男女の格差はもちろん感じたことはないしみんな平等です。ランドセルが無いとか、えんぴつや消しゴム、ノートが無いなんて思ったこともなく、与えられて当たり前という環境で育ってきました。

こんな恵まれた毎日を送っている私。生きていくすべもなく赤ちゃんと共に亡くなってしまった子供達。どうしてそんな国がまだあるのか？悲しくて仕方ありませんでした。

それから数日後、母と姉と私の3人で大きなダンボールに赤いランドセルを詰めて送ることにしました。いざダンボールに詰めてふたを閉めると6年間の思い出がよみがえってきて寂しくなり、また開けては眺めました。ダンボールのふたを閉めてガムテープで止めた時涙が出ました。でもきっとまた誰かのためになり喜んでもらえるはずです。

ランドセルを乗せた船は5月に横浜を出港して半年かけてアフガニスタンに運ばれます。去年は9,567個もランドセルが寄付されたそうです。2004年にボランティアが開始されてからは24万個ものランドセルが届けられていて、現地から嬉しいメッセージも届いているようです。コロナ禍の中でも「思い出のランドセルギフト」のボランティアは継続されているようで、幸せを遠い国に運んでくれていることがとても嬉しいです。一人の思い、それがたくさん集まれば世界を救う大きな力になり、本当に素晴らしいことです。世界ではまだまだ貧しい国があり恵まれない子供達が沢山います。どうか皆さんも協力して欲しいです。私も一人では弱い人間だし、まだ学生なので限られたことしか出来ません。でもこれからは自分には何が出来るか色々と考えてみたいし自分が出来そうな活動は参加していけたらいいなと思いました。

このことはきっと大人になっても幸せな思い出として私の心に残ると思います。ジョイセフの方にも感謝したいし、お母さんにも感謝したいと思いました。そして私も大人になった時にまたこの思いをつなげていけたらいいなと思いました。

特別賞(国際ソロプチミスト山口賞)

SDGs⑤:ジェンダー平等を実現しよう

～ 本当の「誰一人取り残されない社会」とは ～

いしまる ことえ
山口県立防府高等学校 2年 石丸 寿江

現在、持続可能な社会の実現に向けた開発目標として、17の国際目標が設定され、多くの国が取り組んでいる。

私は、その中でも第5の目標として挙げられている「ジェンダー平等について実現しよう」という目標について納得がいけないことがある。それは、この目標の中にLGBTQ+についての言及がされていないことだ。

私は、近年世界の関心が高まっているLGBTQ+がなぜSDGsの目標で言及されていないのか疑問に思い、インターネットで調べた。インターネットの記事には「世界にはLGBTQ+が法律で禁じられ、中には死刑という重罪に問われる国があり、共通目標に含むことができなかった」とあった。

その記事を読んでも、私はそれなら仕方ないとは思えなかった。LGBTQ+の人たちが生きることすら許されない国のある社会が、本当に「持続可能な社会」「誰一人取り残さない社会」と言えるのだろうか。

SDGsが誓っている「誰一人取り残さない」とは、何だろうか。LGBTQ+の人たちを差別する法律から変えていかなければならないのではないだろうか。

確かに、ジェンダーに関する内容は、宗教との兼ね合い等もあるため、他の目標に比べてシビアで、扱いにくい内容であるだろう。

しかし、LGBTQ+の人の命や生き方に関わるため、目を逸らし続けていいことではないことは確かだ。イラクでは、トランスジェンダーを公表していた男性が父親と異父兄弟に殺害されたと思われる事件が起きた。トランスジェンダーである息子を支援していた母親と姉も脅迫を受けていた。このような事例もある。ただ、生まれてきた性別と自分の認識する性別が違っただけで、同性に恋愛感情を持っただけで命を奪われてしまう社会が、持続可能で誰一人取り残されていない社会と言えるのだろうか。

今、私は女性として社会生活を送っている。もしそれが間違いだと言われ、女性として生きることを禁止されて男性として生きていくことを強制されたら、私は精神的

に大きな負担を抱えながら生きていくことになるだろう。私たちは、それをLGBTQ+の人たちに強制していることを自覚しなければならない。

そこで私は、LGBTQ+の人たちにとっての逃げ場のような場所を提供することができれば、宗教の教えを守りつつ、LGBTQ+の人たちの人権や心を守れるのではないかなと思う。もちろんそこにはLGBTQ+でない人たちも生活を共にして、誰も排除されないような場所となるだろう。本来であれば、世界中の人たちが暮らしたい場所で堂々と自分らしく暮らせる世界が最も良い。社会から逃げる様な生活を送らせてしまう点から、これも一種の差別だと言われるかもしれないし、LGBTQ+の人たちからの理解も得られないかもしれない。しかし、宗教への強い信仰心という、その宗教内での正義によって家族や大切な人の命を奪われたり、逆に奪ったりしてしまう世界は、誰一人幸せになれない。その上、持続可能とも、誰一人取り残されていないとも言い難い。LGBTQ+の人たちの逃げ場のような場を作ることで、より性の多様性についての理解も深まるのではないだろうか。そうすることでSDGsの達成目標にLGBTQ+の人たちに関する項目も含められ、本当の意味で「誰一人取り残さない」ことを誓えるだろう。

私は、「誰一人取り残されない社会」とは「誰一人自分を否定されない社会」という風にとらえたい。それは、ジェンダーに限ったことではなく、障がいのある人や病気を患っている人、子どもや大人、そして、これから先の未来を生きる人。この世界を生きるすべての人に当てはまらなければならない。それは、数年単位で達成できる簡単なものではない。しかし、必ず達成しなければならない。

目標設定の今の時点で、「法律だから、宗教だから仕方ない」という理由で取り残される人が出るのを見過ごさなければならないというのは、納得できない。たとえその目標が限りなく困難に近いものであったとしても、その目標はLGBTQ+である人たちにとっての希望の光となると思う。そして、世界中の人たちがLGBTQ+である人たちのことを知り、理解するきっかけにもなるだろう。

だからこそ、私はSDGsのジェンダー平等の目標の中にLGBTQ+に関する目標を含めるべきだと思う。

特別賞(山口ロータリークラブ会長賞)

SDGs⑪:住み続けられるまちづくりを ～ 住んでいるまち、住み続けるまち ～

高水高等学校 2年 ^{むらかみ つばさ} 村上 翼紗

最近、テレビや学校でSDGs（持続可能な開発目標）について触れることが多くなっている。2021年を生きる私たちにとってSDGsは無視することのできない課題となっているのだ。

私自身SDGsについて学んだり考えたりすることが増えてきたと感じる。今年7月、部活動でSDGsについて話し合う機会があった。県内や県外の高校生、大学生とオンラインでSDGsについて考えグループに分かれて話し合うというイベントだ。その時、一番初めに聞かれたことは、

「10年後、今住んでいるところに住んでいると思いますか。」

だ。私はすぐに答えた。

「いいえ。」

と。交通の便は悪く、大きなショッピングモールがない。買い物をしようと思っても欲しい物を売っているお店が近くに無い。不便な事ばかりだ、と感じていたからである。その他にも大学を卒業して就職するとなったら都会がいい。都会に住んでみたいという都会への憧れがあった。他の人たちも理由は様々だが10年後、今住んでいるまちには住まないと思うという人が多かった。私はこの時、住んでいるまちの悪いところばかりが思い浮かんでいた。良いところなどない。都会の方が絶対良いに決まっている、そう思っていた。

次に、

「住みやすいまちとはどんなまちですか。」

と聞かれた。「交通の便が良くて、近くに買い物ができる場所がたくさんあるまち」私はそう思った。特に交通の便の良さはとても大切だと思う。車が運転できれば良いが私たち高校生はそれが不可能である。移動手段は電車かバスになってくる。そうであるにもかかわらず電車やバスは1時間に1本しかなく、私がたまに利用するバスは1日に4本しかない。この意見には多くの人が共感した。やはりいなかには住みづらい。今後人々が住み続けていくのは難しいだろうと感じた。

話し合いを進めていくと私たちのグループはいなかの良さについて話し合うこと

になった。「自然がとてもきれい」「静かで穏やか」など様々な意見が出る中、私は「地域の人同士のつながり」と答えた。私の住んでいた所は数年前、1ヶ月以上断水したことがある。その時に地域の人たちと協力し合った。

「うちでは井戸水が使えるから洗濯物があれば洗うよ。」

「水は重たいから私が代わりに汲んでくるよ。」

など周りの人たちと協力し、1ヶ月を超える断水期間を乗り越えていた。この話をするとグループのメンバーに

「そんなことがあったんだ。都会に住む私には考えられない。いかなかならではの良いいところだよ。」

と言ってもらえとても嬉しかった。私の住むまちの良いいところに気づくことができたのである。もちろん私の住む地域はその断水期間だけでなく普段から協力しながら過ごしている。地域の祭りや子供たちの見守り隊など子供からお年寄りまで全員が交流を深めながら生活している。これは都会ではできないことである。当たり前だと思っていたことが他のところから見るとそうでなく、またそれが生活していく上でとても大切なことであった。

人々が今住んでいるまちに住み続けるには交通の便の問題などがかわってくるかもしれない。しかしそれらは私たちにはどうしようもできない問題である。それとは違い「人とのつながり」は私たち自身で築くことができる。今住んでいるところに良いいところなどないと思っていたが、今まで人々が住み続けているのである。住み続けられる何かしらの良いい理由があるのだ。それらを発見し、今度は私たちが住み続けられるまちをつくっていかねばいけないと感じた。

SDGsは自分たちとは関係の無い話、気にしなくても良いいと感じる人もいると思うがそんなことはない。身近なことだ。実際、私もこのイベントで初めにされた質問がSDGsにつながっているとは思っていなかった。普段の日常会話に出てくるような質問だったからである。難しく考えなくても今ある周りの環境などから自分なりの意見、解決方法が見つかる。それらを自らが実践していき、2030年、SDGs17の目標を達成したい。

2021 年度募集要項

第 61 回「国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト」山口県大会

- ◆ **テーマ** 作文の題目は、「①日本が国際社会でリーダーシップを発揮するためには、どうすればよいのか。」、「②国際協調はどうして大切なのか。」又は「③もし私が世界の問題を一つだけ解決できるとしたら、何を解決しどんな世界にしていきたいか。」のうちいずれか一つとします。なお、作文の内容は、学校、家庭、社会などにおける執筆者の学習や体験あるいは実践などを通し、国際連合について述べたものとします。
- ◆ **応募資格** 県内在住又は在学の中学校生徒または左記に準ずる在日学校在学学生
- ◆ **原稿制限** 400字詰め原稿用紙 4 枚以内
- ◆ **賞** 特賞：2 名、優秀賞：2 名、特別賞：2 名（副賞：図書カード、参加賞：文房具等）

第 28 回「高校生による SDGs に関する感想文コンテスト」

- ◆ **テーマ** 題目は自由。作文の内容は、持続可能な開発目標（SDGs）のうち、いずれか一つを選択し、選択した開発目標について、学校、家庭、社会などにおける執筆者の学習や体験あるいは実践などについて述べたものとします。

持続可能な開発目標（SDGs）

「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、2030年を年限とする 17の国際目標

- | | |
|----------------------|-----------------|
| ① 貧困をなくそう | ② 飢餓をゼロに |
| ③ すべての人に健康と福祉を | ④ 質の高い教育をみんなに |
| ⑤ ジェンダー平等を実現しよう | ⑥ 安全な水とトイレを世界中に |
| ⑦ エネルギーをみんなにそしてクリーンに | ⑧ 働きがいも経済成長も |
| ⑨ 産業と技術革新の基盤をつくろう | ⑩ 人や国の不平等をなくそう |
| ⑪ 住み続けられるまちづくりを | ⑫ つくる責任つかう責任 |
| ⑬ 気候変動に具体的な対策を | ⑭ 海の豊かさを守ろう |
| ⑮ 陸の豊かさを守ろう | ⑯ 平和と公正をすべての人に |
| ⑰ パートナリーシップで目標を達成しよう | |

- ◆ **応募資格** 県内在住又は在学の高等学校生徒（全日制、定時制、通信制）、高等専門学校生徒（ただし、3 年生まで）
- ◆ **原稿制限** 400字詰め原稿用紙 5 枚以内
- ◆ **賞** 特賞：2 名、優秀賞：2 名、特別賞：2 名（副賞：図書カード、参加賞：文房具等）

共 通 事 項

- ◆ **締切及び審査と発表**
令和 3 年 9 月 7 日（火）必着。主催団体において審査し、10 月下旬に入選者に連絡します。
- ◆ **応募作品の取り扱い**
① 応募作品は返却しません。② 入賞作品の著作権は、主催団体に帰属します。③ 作品は自作・未発表のものに限ります。④ 中学生による作文の上位入賞作品については、全国コンクールへ出品します。
- ◆ **個人情報について**
応募者の個人情報については、応募者の選考、連絡のために利用します。これらの目的の他に応募者の個人情報を利用することはありません。
- ◆ **応募先・お問い合わせ先**
〒753-8501 山口市滝町 1-1 山口県観光スポーツ文化部国際課内
日本国際連合協会山口県本部 TEL 083-933-2340 <http://unaj-yamaguchi.sakura.ne.jp/>

令和 3 年 12 月発行

発行元

日本国際連合協会山口県本部

〒753-8501 山口市滝町 1-1

山口県観光スポーツ文化部国際課内

TEL (083) 933-2340



日本国際連合協会山口県本部